

場合衣円七十銭着衣ハ衣円式十銭トシソシテ此ノ金額ノ中宮崎ニ  
支拂フベキ金額ハ宮崎ト相談ノ上定メルコト、ス

油畫科ニ最少限度七人ノモデルヲ確保スルコト 其方法トシテ今  
週現在油畫科ニ配當シタルモデル(七人)ニ對シ七月末日迄繼續  
シテ使備スルコトヲ約束シ確保スルコト 若シ其契約シタルモデ  
ルニシテ欠勤シタル場合ニ於テハ其科ニ於テ善處スルコト 以上

モデルニ給與スベキ金額ニ関スル宮崎トノ内談事項

六月十六日油畫科教官ト教務課トノ協議ノ結果學校長ノ承認セル  
裸体衣円七拾銭着衣衣円式十銭ノ増給ニ對シ宮崎ト入谷〔昇〕助  
教授ト相談ノ結果次ノ如ク決定ス

増給ノ式拾銭ノ内拾五銭ヲモデルニ残リノ五銭ヲ宮崎ニ給與ノコ  
ト、ス 仍ツテモデルノ手取金裸体ハ衣円五十五銭着衣衣円五銭  
宮崎ハ衣人拾五銭トナル

學校ニ於テ直接雇入レタルモデルニ對シテモ右ニ同シ

### ⑩ 天心顕彰氣運と天心祭

「大東亜共榮圈」建設のスローガンが打ち出されるや、岡倉天心  
の“Asia is One”という詩的な語句を日本のアジア諸国に対す  
る軍事侵略の一標語と看做して天心を持ち上げる動きが起った。

それが特に顕著となったのは昭和十七年であり、その中心人物は横  
山大観であった。一月七日には財団法人岡倉天心偉績顕彰会が設立  
され、会長には当時の美術行政の最高顧問であった侯爵細川護立が  
就任し、大観は評議員理事長となり、斎藤隆三が専務理事、安田靉

彦、小林古徑、前田青邨らが理事となった。六月、同会は第一回事  
業として天心終焉の地赤倉に記念館赤倉山荘および記念碑の建設に  
着手し、十月五日には共立講堂で日本美術院、東日との共催による  
岡倉天心三十周年記念講演会を開催、大観、田村剛、織田正信、脇  
本葉之軒らが天心について講演した。また、茨城県五浦の天心遺蹟  
を遺族米山辰夫から譲り受けて保存することとし、十一月八日には  
遺蹟に建設された記念碑の除幕式を行なった。大観を中心とするこ  
のような動きは美術界に大きく影響し、天心特集を組む雑誌が現わ  
れ、天心顕彰を旨とする論説が各誌に登場した。

こうした風潮に押されてか、昭和六年の天心記念銅像建設以来天  
心に関する催しの無かった本校でも十七年十月五日に天心祭が挙行  
された。『旬刊美術新報』第四十五号(昭和十七年十二月二十日)は  
次のように報じている。

天心祭盛大 偲ぶ 英邁な東亜の先覺

東京美術學校興亞部(報國團興亞部)では、四十年前世を擧つて西洋文明に傾倒

した時、「亞細亞は一なり」の語を掲げ、我が國粹美術の高貴性  
と優越性を説き、日本が東洋文化の盟主たるべきを世界に向つ  
て唱導した先覺、故天心岡倉覺三氏の、今年が恰も三十年に當る  
ので、故人の人格を偲び、その偉業を回顧し、現前の時局下、自  
覺と決意とをその靈前に誓ふべく、この程天心祭を舉行した。時  
は十月五日、その午後一時から、東京美術學校校庭内の天心銅像  
前で美術關係者多數參集、嚴肅な祭典を行ひ、終つて同校講堂で  
六角紫水氏の講演を聴取した。尙、同五日から八日まで同校陳列

館で、天心居士の遺品展を開催し、連日盛況であつた。

また、当時率先して天心顕彰のために筆を揮っていた清見陸郎は、『日本美術』第二巻第一号（昭和十八年一月）において、次のように詳しく論じた。

岡倉天心先生を憶ふ——美校の天心祭に臨みて——

清見 陸郎

岡倉天心先生逝つて三十年、時しも大東亞戰爭開始後滿一年ならんとする過ぐる十二月五日、往年先生らによつて創設された東京美術學校において行はれた天心祭は、いろ／＼な意味で甚だ意義ある企だつた。この催しは學校當局によつてなされたものではなく、最近同校在學中の各科學生有志連によつて興された興亞部の主催によるものであることを知ると、短時日の準備でよくもこれだけのことができたものと、青年らしいその熱情を壯とせざるを得ない。

そのせいでもあつたらうか、校庭なる天心先生記念銅像前における慰靈祭はいさゝか寂寥の感がなくもなかつた。教員職員側からは、今日では同校における唯一の天心先生の遺弟たる六角紫水教授その他二、三の助教授諸氏の顔が見えたゞだけで、校長はもちろん、率先この催しに賛成協力するはずに思へる日本畫科側から、一人の教授も、いな一人の生徒すらも參列してゐない事實を目にすると、いさゝか異様の思ひがせぬでもなかつた。しかし、これにはまた局外者の窺ひ知るべからざる事情があるのであら

う。とにかく、少數とは云へ、當日參列した人々の中には、書生時代から天心邸に奉仕して、前後數回に及ぶ天心先生の支那古美術踏査には、影の形に添ふが如くに隨伴助力した早崎稔吉氏もをられたし、前期日本美術院時代から天心先生の指導を受け、それゆゑにこそ美校の記念像を初めとして、幾たびか天心像の製作を試みた平櫛田中氏もをられたし、それらの愛弟子たちの心から捧げる玉串をば先生の靈も必ずや喜んで受納されたことゝ思ふ。

記念像前での式が終へると、生徒も來賓も講堂（講堂）に集まつて紫水教授の天心先生思ひ出話を拜聴した。周知の如く、同教授は美校漆工科第一回の卒業生であり、有名な明治三十一年の、學校騒動の際には、雅邦、廣業、大觀、觀山、春草、その他の先輩、同僚らと共に美校の教職を擲つて、下谷谷中に日本美術院を興（興）した一人である。その後日露戰爭勃發の日に當り、天心先生が遠く海を渡つてポストンに赴いた時にも、その携へた三人の愛弟子の一人として教授も加はつてゐた。かゝる人からの多方面にわたる天心回想談が面白からぬはずはなく、講堂を滿たした美校生徒連の間からは、幾たびか同感と感激との力強い拍手が湧きあがつた。

もつとも、そこに語られた事柄の大部分は、わたくしにとつては初耳のものではない。天心傳を書かんがために、わたくしはこれまで幾たび紫水教授の門を叩いたか知れず、微に入り細にわたつてノートも取つてはあるのだが、しかし、天心先生ほどの偉材にさばかり深く親炙した人の話は、何度繰り返されても、その都度新たな感激をもつて聴くことができるのである。特にその日は、紫水教授は何事か激する所あるものゝ如く、その語調には

異常なる熱情が籠り、何さまこの元氣あればこそ七十六歳の今日において、なほかつ倦むを知らざる藝術的精進が續け得られるのだと、今さらに老教授に對して尊敬の念を新たにしたのであった。

興味津津たる回想談を終るに當り、教授は云つたのである。

「今日世間は『アジアは一なり』の天心先生の言葉を想起して、今さららしく先生の偉大さを喋々し始めたが、先生は實に四十年の昔においてこのことを喝破されたのである。その先生は本校の事實上の設立者であり、我々の父であり、すれば東京美術學校こそ、とりもなほさず『アジアは一なり』の本家本元と云はなければならぬ。現時わが國の學生たちは、その在學する學校の何たと、學科の如何とを問はず、みな時代の尖端に立つて奮勵邁進すべき責務を負はされてゐる。それゆゑあらゆる青年が『アジアは一なり』の心をもつて奮進しなければならないのは云ふまでもないが、わけても本校の生徒諸君は、以上の理由から、青年中の青年、學生中の學生として、つねにその先頭に立つの意氣と覺悟とを有すべきである。」

まことに今こそは皇國創業以來の大國難の日であり、従つて藝術などは當面用をなさざるものとして輕視閑却されがちなのだから、なほのことこの道に志すものは、氣宇を壯大にし、理想を高所に据ゑて時流を導くの意氣抱負を有せねばならぬ。その場合天心先生の理想としたところは、同時に我々の理想でもなければならぬのに、依然たる或る方向の無理解、冷淡さは……かゝる憤が老教授を驅つて、この一時間半にも及ぶ熱辯をなさしめたのであるまいか。

教授の講話が終る頃には、すでに講堂内は薄暗くなりかけ、やがて我々は校庭の一隅に建てられた俱樂部の方へ案内されて、そこで生徒のたてまへによる抹茶の御馳走になつた。生前「茶の本」を英文で書き、茶道を通じて日本藝術の眞精神を説いた天心先生を追回する集まりであるだけに、このおもてなしはなか／＼に懐かしく、それだけにこの方面の行儀作法になんら習ふ所なき自分自身を取づかしくも思つた。

時節がらとて乏しい井物などを突つつきつゝ、その晩生徒諸君と膝を交へて心ゆく限り天心先生を語つたことも味ひ深い。先生は御酒がお好きだつたといふので、少々大量に像前にお供へ申した一升壺を、みんなしてちび／＼頂いたのも、寒さが身に沁みて來る夜となつては有難かつた。酒そのものよりはこの懐かしい氣分とトロリとなつたわたくしには、過ぎ去つた三十幾年もの昔が昨日のこのやうに回想された。この俱樂部の座敷に坐るのは、わたくしは初めてだが、しかし美校そのものは、わたくしには必ずしも無縁のものではないのだから、無縁どころか、なかば「母校」とでも呼びたい氣持をわたくしはこの學校に對して抱いてゐるのだから。なぜなら、その遠い昔において、わたくしも一生徒として、ほんの一年ほどではあつたが、毎日こゝの校門を潜つたおぼえがあるのである。さうしてさういふ過去を有すればこそ、おほげなくも天心先生を傳することに自分の筆力の限りを盡さうと奮ひ立つたわけなのだが。

食事が終ると早崎稷吉氏が語り高村豊周氏が語り、また他の二、三の方々も語つたが、とくに高村氏の話したことがわたくし

の心に残つた。年齢から云つて、もちろん高村氏自身天心先生に親炙したわけではない。それらの話はみな悉く、氏が亡き父君たる光雲翁から聴取したところであり、その中の或るものはわたくしも「光雲回顧談」で讀んでこれを拙著の中に引用してゐるからゐのだが、しかしこのやうな集りにおいて、光雲翁自身の血を分けた人の口から聞かされれば、またしみ／＼と胸を打つものがある。天心先生の教育法は天才教育であり、啓蒙教育であり、およそ謂ふところの劃一教育とは正反對のものだつた。それだけに他の長所を認めることにかけては實に鋭く、光雲翁の如きもこの先生の炯眼によつて陋巷の片隅から見出され、さもなくば一本彫職人として終つたかも知れないところを、あの藝術的高所まで登り得たのだと、つくづく高村氏の活を聴いてゐるうちに感じさせられた。

天心祭の當日から三日間、天心先生遺品展覽會が校内陳列館で開かれたが、これも甚だ有益な展覧だつた。先生自身の筆になるものとしては、明治二十六年および三十九年中の支那旅行日記や、四十一年中の歐洲旅行日記が出陳されてをり、わたくしのやうな傳記者の立場からは、これこそ最も珍重すべきものに思へた。それから先生が隣邦の古美術を探らうとしていかに熱中したかを物語る早崎氏に與へた何通もの尺牘を初めとして、即興の詩歌、愛用の茶器、辨當箱、インド旅行中に使用したといふ異國趣味豊かな乾笠銀縷腰帶、先生獨自の工夫になる頭巾、羽織等々、一として常凡を擯んずること遙かだつた故人の風貌を偲ばしめざるものはない。

のみならず、そこにはまた芳涯（佳）の「悲母觀音」や「大鷲圖」、雅邦の「白雲紅樹」「月夜山水」、春草の「水鏡」、觀山の「天心先生像」下圖等も陳列されてをり、いかに先生がこれらの諸畫人に對して偉大な感化を與へたかをまざまざと語るものがあつた。（先生の眞精神を最も力強くその藝術の上に生かした大觀氏の作物を見ることのできなかつたのはいさゝか遺憾だが。）人手不足のせいかして、最近の春秋の美術シーズンにも美校の陳列館はいつも閉鎖のまゝであることを寂しく感じてゐたゞけに、一層今度の展覧は有難かつた。お影で天心先生關係の物のみならず、階下の陳列室に常置されてあるわたくしの大好きなアフガニスタン出土の佛頭巾や唐俑、また下村仙氏寄託の天平、藤原期の佛像等々を心ゆくまでおろがみ味ふことができた。

それにつけても常陸の五浦なり、越後の赤倉なり、天心先生にとつても最も縁故深き土地に、「天心記念館」とでも稱すべきものが建てられたならと思ふ。そこへ行きさへすれば、先生に關するあらゆる事物——先生の著書はもちろん、その原稿も、手記も、知己、朋友、門人等に送つた書簡も、今度の展覽會に出陳されたやうな遺愛の物品も寫眞も、およそ故人を偲ぶに宜しきあらゆる物をそこに見ることができるといふやうであつたら、どんなにかいゝだらうと思ふ。聞けば日本美術院では再び「天心全集」の編纂に着手し、今度こそ決定版的のものを作るといふことだが、百尺竿頭一步を進めて、かゝる記念館の設立をも遠からぬ將來に實現して頂けないだらうか。

この天心祭について西大由氏は面白い話をして下さった。それによると、もともとの発案者は松本博臣（末田利一の実弟）で、彼は血気にはやる男であった。昭和十年に彫金部予科に入学したが、清水南山と喧嘩して退学。兵役に就き、帰ってから丸山不忘の家で鋳物を学んで一人前となった。昭和十六年、西大由氏と一緒に鋳金部を受験して落ち、翌十七年に入学を果たした。入学したばかりのとき、彼は天心祭をやらねばならぬと主張し、有志に働きかけて遂に挙行した。当日、日本美術院などからも人が来て、銅像の前で玉串奉奠となったとき、澤田源一校長も参加しようとしたが、「あなたはダメ」と言って松本が拒絶したため、校長は帰ってしまったという。恐らく松本は学校としての天心祭挙行を校長に提案して拒否されたため、このような挙に出たのだろう。

天心祭は翌十八年には挙行された形跡が無く、十九年九月二日の天心の命日に、再び生徒たちの希望により挙行されている。戦局が日に日に悪化する中で、生徒たちは天心の思想に精神的拠り所を求めようとしたのかも知れない。

### ⑰ 配属将校への抵抗

「これは編者の依頼によって昭和十七年工芸科鋳金部卒業の伊藤豊氏が寄せられた回想記である。」（平成七年十月）

「いい学校だったなあ」というのは、我々美術学校卒業生が旧懐をあたためる中での一コマである。仕事（勉強のことを「仕事」と言う風習があった）のことになると結構ガツガツしたものが、その他モロモロは極めてノンキに構えていたものだ。学校に顔を出す

にも、先ずゆきつけの喫茶店で眠気さましのコーヒー。出来るだけゆっくりねばって召上る。それからおもむろに校門をくぐるのだが、どなたも遅刻を遅刻と心得ていない。当然課題の時間が足りなくなるから、帰途につく頃は夕暮れのせまる頃だ。校門を出たところに東京市初期のアンティークなガス灯が何基かあって、市のオジサンが長い柄の点火棒で火を入れてまわっているのを見ながら山を降りた。ガス灯のマントルは点火してから高輝度まで、タイムラグがある。薄いミルク色の夕靄の中で青白いガスの炎が明るさを増してゆく。如何にも優雅な演出であった。

しかしながら当時の世界情勢は第二次世界大戦へとひた走りに走り続けていたのである。昭和十一年、あの大雪の中で二、二六事件が勃発、首都圏は騒然となった。ノンキを極め込んでいた美校生たちも流石に軍ファッショのキナ臭さを軍靴のひびきの中から嗅ぎ取らざるを得なかった。その決定的な事件が繰り上げ卒業である。我々は五年で卒業のところ、最終の一年を半分削られてしまった。本来、卒業制作は一年かかりきりであったのが半分になったのでは十分な「仕事」になる訳がない。おまけに九月という残暑のさかりに卒業というなんとも妙なことになってしまった。入学当初から心に留めていた卒業制作は、軍部の兵員増強という政策の前にひねりつぶされてしまったのだ。学生有志で大挙して文部省にかけ合うか、なぞと話が出るが、国政の権力をすべて手中にしているのが軍部であれば到底打開の道なぞあり得ない。忿懣やる方なさを胸に秘めて、削り取られた空隙を埋めようと卒業制作の期間ばかりは寸暇を惜しんだ。当然のことながら軍事教練の時間はサボりにサボった。